連合会だより

ブータン王国での工事受注までの経緯

丸新志鷹建設㈱　志鷹新樹

1．はじめに

ブータン王国は、王室の主導により民主化が進められているユニークな国です。最近日本でも知られるようになった「GNH（国民総幸福量）」という言葉は1976年当時21歳だった４代国王によって提唱された「国民総幸福量は国民総生産よりも重要である」という言葉から生まれ、その基本方針は１）健全な経済成長と開発、２）環境保全と持続的な利用、３）文化の保護と振興、４）良い統治の４つの柱が基本方針になると考えられています。30年の年月の経過と共にGNHは具体的な施策として何ができるか問われる時代になっています。

1966年に創立したアジア開発銀行（ADB）は「貧困のないアジア・太平洋地域」というビジョンを掲げ、融資等を通じて国づくりを支援しています。2009年７月に行われたADBの国別支援戦略の中間評価では、中核的な４セクター（道路、電力および地方電化、都市インフラ、金融・民間セクター開発）における、プログラムとプロジェクトを通じて貧困を削減する戦略とブータン王国政府の第10次計画と合致しており道路網プロジェクトを推進することとなりました。その一部が今回の道路工事です。ここでは、当社がどのようにしてブータン王国で受注に至ったかについて紹介します。

2．ネパール共和国への進出

1970年にプロスキーヤーの三浦雄一郎さんがエベレスト大滑降を敢行しました。そのとき同行したのが親戚の佐伯富男（第一次南極観測越冬隊員）でした。

1990年エベレストの麓の村クムジュンと立山の麓芦峅寺の交流の打診が富男にあり賛同していたが、逝去してしまいました。芦峅寺の有志８人がクムジュンスクールへ調査隊として訪問し、立山芦峅小学校・クムジュンスクールの姉妹校提携をすることとし、翌91年11月立山芦峅小学校で両校関係者、エドモント・ヒラリー夫妻、クリス・ボニントン、田部井淳子ら臨席のもと姉妹校提携の調印をしました。私は調査団に参加し、PTAの世話をすることで関わりが深まっていきました。　交流は主に隔年で行う生徒の相互訪問でした。

その頃のネパール王国は私が生まれた頃の日本とよく似て懐かしささえも感じられましたが、インフラ整備が喫緊の課題であると感じたのと失業者があふれていました。クムジュンスクールの卒業生も働く場を求めていました。

92年首都カトマンズにネパール支店を開設しました。しかし、ネパールで外国企業がネパール政府の工事を請負うことは難しく、現地法人（エヴェレストニルマン）を介して、道路、小水力発電所、吊橋工事などを手掛けてきました。丸新志鷹建設としては、アジア開発銀行（ADB）支援の「メラムチ給水プロジェクト」の迂回路改良工事を2004年末に落札。施工区間22km、予定工期18ヶ月という内容でしたが、05年

メラムチ給水プロジェクトの迂回路改良工事

の政変により、同年３月に予定されていた契約が2008年５月にずれ込んだほか、着工後は共産主義反政府組織らの反対にもあい、工事は長期化しました。それにより、落札から約６年半を経た昨年４月末に１部区間を残して完成し、本年４月までメンテナンス期間にあります。　結果的に工期は36ヶ月に及びましたが、当社が粘り強く遂行したことで、ネパール政府やカトマンズ市民から評価を得ることができたと考えています。こうした実績がもとで、昨年１月には、同国から「カルナリ川灌漑プロジェクト」を受注（受注金額約11億円）、10月にはADBが融資するブータン政府の国道工事３件（受注金額約15億円）も契約にも至ったのであります。

３．おわりに

当社における海外事業展開は国際交流の一端より発したものでしたが、人のつながりの重要さを感じております。信頼できるパートナーが必要です。日本の会社として

カトマンズソーラーシステム

カルナリ川灌漑プロジェクト

ネパールの仕事を受注するのに16年、ブータンでの受注に20年かかりました。　昨年国土交通省より、地方・中小建設企業のための海外進出ガイダンスが出され、海外進出の支援を頂いていると思いますが、せめて中小建設業者にも、日本のODA工事についての参加資格を与えて頂きたいものだと思います。また、ファイナンスの面についても支援を頂きたいものと思っています。当社のブータンでの仕事は始まったばかりです。　期待と不安と希望を持ちながら、社員一同がんばって行こうと思いますので関係各位のご支援、ご鞭撻をよろしくお願いします。